

広報

# あかしけ

# 9

とれたて、ふるさとの味。

● 特集

Akaike pear

# 赤池梨

今年「蝶屋ミスジャポンコンテスト」でグランプリに輝いた白川美帆さん(桜ニュータウン)。テレビ・CMなどで活躍中です。





香気と甘味豊かな旬のリレー、  
秋到来を告げる特産品。

# サ

クツとした歯ざわり、口に広がる果汁と甘さ。赤池町の農産物特産品としてナンバーワンの知名度と人気を誇る「赤池梨」が最盛期を迎えました。

贈答品に喜ばれ、お盆の帰省客をもてなした「幸水」。濃厚な味わいが魅力で今から旬を迎える「豊水」。大きさも味も横綱級、秋のテーブルを飾る「新高」。赤池梨の主力三品種は、夏から秋にかけて「旬」のバトンをつないでいきます。

「梨はやっぱり赤池産」「毎年口にします」という人は多いけれど、その歴史、特徴、栽培方法などはあまり知られていません。今月は、お得な豆知識も含めて、赤池梨にまつわる

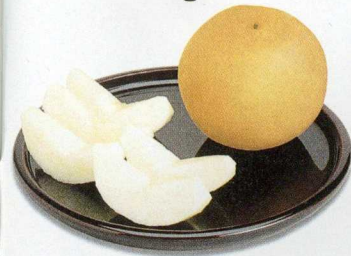
情報を一挙公開。

わたしたちのふ

るさとの味、赤

池ブランドの梨を

特集します。



## 【まずは梨について】

梨はバラ科の落葉高木で、日本梨（梨）、中国梨、西洋梨（洋梨）の3つに分類されます。一般的に「梨」と呼ばれるのは日本梨で、日本で初めて栽培された果実といわれるほど歴史があります。「日本書紀」の中で720年・持統天皇の章にその栽培の記述を見ることができ、登呂遺跡など弥生時代の古墳や遺跡からも炭化した種子が見つかっています。鎌倉時代にはすでに日常的に食べられていたようです。江戸時代には盛んに品種改良が行われ、「梨栄造育秘鑑」などには94の品種名が記載されています。明治20年代後半には「長十郎」「二十世紀」が発見され、その後、各地の試験場で梨の改良・育成が行われました。現在、代表的な品種として「三水」と呼ばれる「幸水」「豊水」「新水」があります。これらは肉質が柔らかく、甘みが強いうえ、無袋栽培ができることから、全国的に普及しています。

## 【山肌で栽培する赤池梨】

赤池梨の最大の特徴は、山肌などの斜面で栽培されることです。傾斜があることで水はけがよく循環が早いこと、日照が効率的に得られるという利点があります。一方で、平地に比べ栽培に手間がかかり、土壌の乾燥も早く、肥料が流れてしまうという欠点もあります。赤池の梨農家のみなさんは赤池梨の品質と味にこだわり、あえて山肌での栽培に取り組んでいます。



### 新高

10月上旬～10月下旬

【にいたか】甘みに上品な味わいがあり、香気に富んだ梨です。日持ちも良く冷蔵庫で保存すれば長期間食べることができます。大型品種で大きなものは1kg近くにもなり、見た目にも立派で贈答品にも喜ばれます。大正4年に「天の川」と「今村秋」を交配して育成（神奈川県農業試験園芸部）され、大正11年に初めて結実。昭和2年に命名発表されました。秋のテーブルを飾る香り高い梨です。

### 豊水

9月中旬～9月下旬

【ほうすい】果肉は柔らかく、果汁を多く含みます。豊かな甘みと酸味のバランスがとれた深みのある味が親しまれています。糖度も高く濃厚な味わいが評判です。日持ちも良いのできちんと保存すれば長期間食べることが出来ます。「豊水」は「幸水」に「石井早生」と「二十世紀」をかけ合わせたものを交配させ、昭和29年に育成（農林省果樹試験場）したもので、昭和47年に「豊水」と命名されました。

### 幸水

8月中旬～9月上旬

【こうすい】多汁で酸味が少なく、独特の香り高い風味があります。歯ざわりもよくさわやかな甘さが特徴で、お盆の暑い時期に最盛期を迎える品種です。温室育ちのものは早く出荷され、7月初旬には出回ります。「幸水」は昭和16年に「菊水」と「早生幸蔵」を交配した実生から育成（農林省農技研園芸部）したもので、昭和22年に初めて結実し、昭和34年に命名発表されました。

# 主力三品種

# 赤池梨

Akaike pear

【あかいけなし】

# 明治末からの歴史を持つ芳醇な果実「赤池梨」

The history of Akaike pear. / There was a pioneer.

# 開拓者がいた。



開墾を拡大し複数品種の栽培を導入した

## 平川 外曾次郎

【ひらかわ・とそじろう】1892 - 1971

### 【八区長時代の事業】

昭和22年から16年間、赤池町の助役として町づくりの指揮を執った平川外曾次郎。耕地改革、堤防の整備、かんがい用水の配備、町道の拡張・幅などを手がけたとされ、その功績は数知れません。助役就任前の外曾次郎は、市場八区の区長を38年間にわたり務めました。この区長時代に外曾次郎が取り組んだ最大のプロジェクトが「梨山の開墾」でした。場所は市場飛石周辺の原野山林、広さはおよそ6町歩。そこには当時マツタケも採れたという松林も

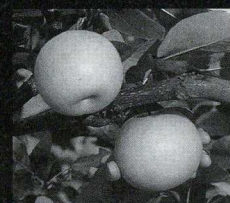
### 【生産と品質の向上】

広がっていました。戦前の不景気のなか、現在の失業対策事業にあたる救済事業の一環として取り組んだのです。

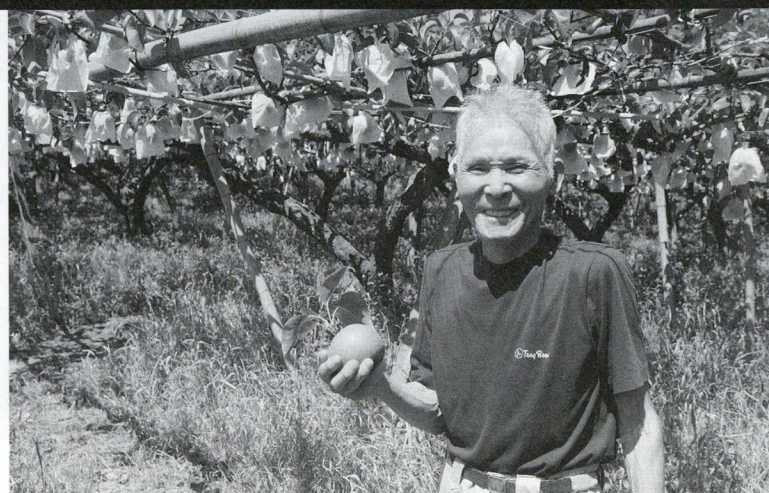
梨山は昭和5年ごろからおよそ5年の歳月をかけて開墾。作業員を10人ほど雇って早朝から日没まで、ノコギリを片手に原野山林の伐採に挑みましました。当初はお茶の栽培を拡大する考えだったそうですが加工面などで断念、すでに市津で栽培されていた梨に目を付けました。品種は「長十郎」のほか、特に「新高」に着目。この新高はその後人気を博し、現在の赤池梨の主力品種として定着しています。また、自然交配を進めるため複数品種の栽培を導入し、梨の生産を飛躍的に伸ばしました。

栽培面積、生産高、品質の三者が向上し、現在のブランド「赤池梨」の地位が確立されました。平川外曾次郎による特産品開発が、文字どおり「実」を結び、現在に至っています。

(敬称略)



↑主力品種になった「新高」

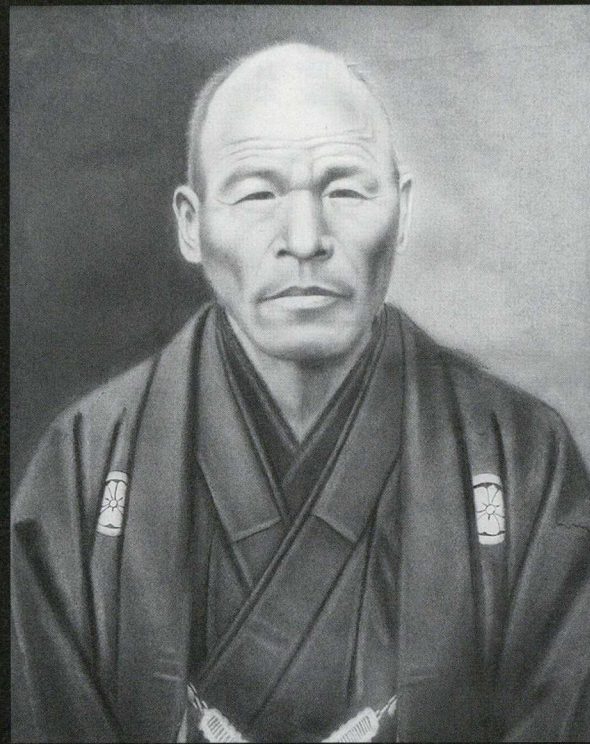


外曾次郎氏の子、平川正喜さん 85歳(8の2)。「お前たちに任せる」と言われ、父から兄(故・繁樹さん)とともに梨山を譲り受けました。炭鉱で働きながら梨栽培を手伝う正喜さんの熱心な姿に外曾次郎氏がほれ込んだそうです。外曾次郎氏は意志が強い正直者との周囲の評判で、人望も厚く、教育熱心だったと言います。(受け継いだ梨園の前で)

原野山林を切り開いた果樹植栽の先駆者

## 久原 實蔵

【くはら・じつぞう】1861 - 1934

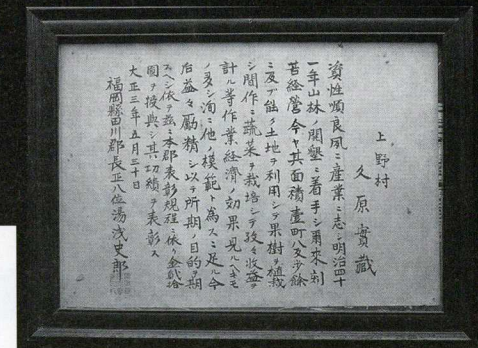


### 【明治41年に着手】

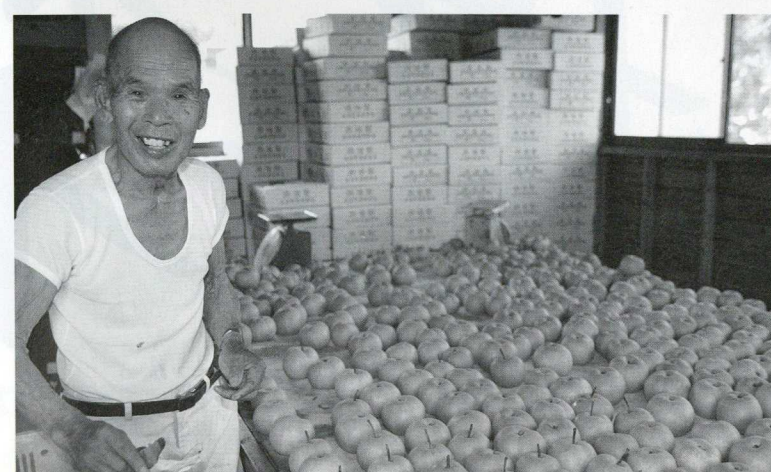
多くが山肌の斜面で栽培される「赤池梨」。そこはもともと山林あるいは原野で、栽培とは無縁な土地でした。これを切り開き、実りある土地へと導いた先駆者の筆頭に、久原實蔵がいます。實蔵は明治41年に山林の開墾に着手し、間作を行いながら果樹植栽の面積と収穫の増加を計りました。大正3年に實蔵が受けた田川郡長・湯浅史郎からの表彰によると、一町八反におよぶ土地を有効利用し、他の模範となる経済効果を上げることが分かります。

### 【気持ちの大きな人】

孫にあたる久原良助さんに祖父の面影をうかがいました。「よく近所の人を寄せて酒を振る舞っていました。世話好きで酒好き、気持ちの大きい人でしたよ。果樹園につながる山道沿いに桜を植え、並木の下を通って仕事場に向かうという風流な人でもありました」。一人ではどうしていきな開墾の求心力となった實蔵。人に好かれ、人が集まってくる人物像が浮かび上がってきます。實蔵の豊かな人間性は赤池の梨栽培の礎をつくった大きな要素だったのではないのでしょうか。(敬称略)



↑實蔵が受けた田川郡長からの表彰状(大正3年)



實蔵氏の孫にあたる久原良助さん(市津)。祖父、父からの梨園を守り、息子さん夫婦と二代で梨作りに励んでいます。選果の目は厳しいですが、梨づくりの話になるとやさしい表情に早変わり。83歳で現役の大黒柱です。